

戦後日本の中国哲学・思想史研究における比較思想的な

観点や視座について——問題提起を兼ねた概観——

伊 東 貴 之

一 比較思想の立場から見た、戦後の中国哲学・思想史研究

小論では、まず戦後の中国哲学・思想史研究に現れた比較思想的な観点や視座について、少しく概観してみたい。この分野では、総じて、直接、比較思想的な研究を志すものは稀少であるが、これは、中国の哲学・思想の研究が、歴史的な状況と連動してなされる傾向が強いこと、その意味で、動もすれば、当該の地域性に還元されがちな性格を強く有していることと無関係ではなからう。翻って、比較哲学・思想の研究者には、西洋哲学や仏教学などの専門家が多いと思われるが、この点は、そうした分野が持っている、ある種の普遍性への志向の反映とも考えられよう。しかるに、同時に中国の哲学・思想の研究においても、さまざまな意味で、暗黙裡には、西欧や日本などとの比較が一定の前提になっているとも言える。また、逆に歴史

的・具体的な交流や交渉に関する研究は、比較的多く見受けられる。以下では、特に比較思想的な含意を有する研究について、その特徴から幾つかの類別化を行うとともに、それぞれの代表的な論者を紹介したい。

まず、(一) ヨーロッパ世界(特に啓蒙思想家やフランス)との思想的な交流や交渉を検証したものとして、夙に戦前の成果として、後藤末雄『支那思想のフランス西漸』(第一書閣、一九三三)↓のち『中国思想のフランス西漸』と改題、矢沢利彦校訂・全二巻、平凡社・東洋文庫、一九七四)が、そのいわばバイオニア的な存在として挙げられる¹⁾。また、同様の関心に発した、堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』(上・下)(明治書院、一九九六・二〇〇二)、次いで、井川義次『宋学の西遷——近代啓蒙への道』(人文書院、二〇〇九)などが、近年の参照すべき労作として、特筆に値する。

次いで、(二) いわゆる三教(儒・仏・道)交渉史の研究は、日本の中国学のお家芸とも言える領域である。戦後の主要な成果として、荒木見悟『仏教と儒教——中国思想を形成するもの』(平楽寺書店、一九六三)・研文出版より再版、一九九三)、同『明代思想研究——仏教と儒教の交流』(創文社、一九六九)、吉川忠夫『六朝精神史研究』(同朋舎出版、一九八四)、福井文雅『欧米の東洋学と比較論』(隆文館、一九九一)、同『漢字文化圏の思想と宗教——儒教、仏教、道教』(五曜書房、一九九八)、小林正美『六朝道教史研究』(創文社、一九九〇)、同『六朝仏教思想の研究』(創文社、一九九三)、吾妻重二『宋代思想の研究——儒教・道教・仏教をめぐる考察』(関西大学出版部、二〇〇九)などが挙げられる。なお、このうち、福井文雅氏は、実際の交渉や交流という前提を缺いた一般的な比較思想研究に對しては、むしろ否定的な論者としても知られている。

さて、いよいよ(三) いわゆる比較思想的な研究へと目を転じてみよう。この領域では、何と言っても、豊富な哲学的内容を含む朱子学を俎上に載せる事例が顕著である。

まず、研究史上、最も代表的な見解として、(1) 朱子学の思想体系(理気論など)をトマス・アキナスの靜態的な哲学体系に比擬するものがある。政治学・政治思想史の分野での成果ではあるが、丸山眞男『日本政治思想史研究』(東京大学出版会、一九五二)が最も有名であり、その後の研究にも多くの影響を及ぼした。同書は、ボルケナウの「自然」から「作為」

へという図式とヘーゲル弁証法の「正↓反↓合」の図式とを接合しつつ、それに「朱子学的自然↓徂徠学における作為性↓作為を包括した自然としての宣長学」という展開を準えるが、潜在的には、後述するように、日本儒学を早い時期に分類した井上哲次郎らの図式との類似性も伏在しているやに思われる。また、守本順一郎『東洋政治思想史研究』(未来社、一九六七)は、マルクス主義に依拠して、一面で丸山氏の図式や観点を批判するものであるが、朱子学の体系をトマス・アキナスの哲学に比擬する点では、同断である。なお、マルクス主義の立場からの比較思想的な視座や参照枠組を内包する研究としては、他にも、岩間一雄『中国政治思想史研究』(未来社、一九六八)、同『中国の封建的世界像』(未来社、一九八二)などが挙げられる。これに對して、(2) 朱子学の思想体系(理気論など)をアリストテレスの哲学を引証して、説明する立場があり、先駆的なものとして、安田二郎『中国近世思想研究』(弘文堂、一九四八)・↓のち筑摩書房より再版、一九七五)が挙げられる。また、比較的近年のものでは、桑子敏雄『価値の根拠について——アリストテレスと程伊川・朱子』(『比較思想研究』第十七号、一九九一)が、朱子学のダイナミズムは、むしろアリストテレス哲学にこそ比擬し得るものとして、前述した丸山氏らの所説を批判している。

また、特に倫理学畑の研究者などによって、(3) 朱子学の倫理学とカントの道德哲学との類似性などを指摘するものが散

見される。こうした観点にもとづく研究成果としては、主なものに、山本命『宋代儒学の倫理学的研究』（理想社、一九七三）、同『明代儒学の倫理学的研究』（理想社、一九七四）、高橋進『朱熹と王陽明——物と心と理の比較思想論』（国書刊行会、一九七七）、木村英一『中国哲学の探究』（創文社、一九八二）、山根三芳『朱子倫理思想研究』（東海大学出版会、一九八三）などがある。

次いで、比較思想的な視点とともに、第一義的には、むしろ（４）日本の儒学思想や韓国・朝鮮との比較・対照や交流・交渉を念頭に置くものが、伝統的にも有力な分野でもあり、それなりの蓄積もある。夙に明治期に、井上哲次郎による『日本陽明学派之哲学』（富山房、一九〇〇）、『日本古学派之哲学』（同、一九〇二）、『日本朱子学派之哲学』（同、一九〇五）の有名な三部作があり、例えば、朱謙之（一八九九〜一九七二）の『本来的朱子学』（三聯書店、一九五八）、『日本古学及陽明学』（上海人民出版社、一九六二）、『日本哲学史』（三聯書店、一九六四）の如き、戦後中国での研究上の枠組にも多大な影響を与えている他、前述した丸山眞男『日本政治思想史研究』などにおいても、暗黙裡の前提となっているように推察される。なお、同書の英訳『*Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*』, trans. by Mikiso Hane, University of Tokyo Press, 1989. ではその序文において、江戸儒学に対する朝鮮儒学の影響の大きさについて言及し、注意を促すとともに、日本語版への若干の修

訂を加えているが、その際にも引証されているのが、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』（東京大学出版会、一九六五）である。また、近年では、澤井啓一『記号』としての儒学』（光芒社、二〇〇〇）なども、中国・韓国・日本の儒学思想に対して、比較的等分目配りした著作として、注目に値する。

翻って、（５）中国思想の特質やその特徴、国民性などを究明しようとするものについて、少しく紹介したい。インド哲学・仏教学から出発して、比較思想研究の分野を開拓した、本学会初代会長でもある、中村元の『東洋人の思维方法Ⅱ——シナ人の思维方法』（みすず書房、一九八四）↓のち『決定版・中村元選集』第二卷、春秋社、一九八八）では、漢民族の思维の特徴として、①具象的知覚の重視、②抽象的思维的未発達、③個別性の強調、④尚古的保守性、⑤具象的形態に即した複雑多様性の愛好、⑥形式的斉合性、⑦現実主義的傾向、⑧個人中心主義、⑨身分的秩序の重視、⑩自然の本性の尊重、⑪折衷融和的傾向といった諸点を挙げて、考察を加えている。翻って、岡田武彦『中国思想における理想と現実』（木耳社、一九八三）↓のち『岡田武彦全集』第十九卷、明德出版社、二〇一〇）、同『中国と中国人』（啓学出版、一九七三）↓のち『岡田武彦全集』第二十卷、同（二〇一〇）では、儒家の理想主義、法家の現実主義、並びに、道家の超越主義の鼎立や棲み分けに、その特質を見出している。その他、最近では、これまでむしろ中国の周縁部と観念されてきた、北方ユーラシア史学の専門家に

よる、岡田英弘『中国文明の歴史』（講談社現代新書、二〇〇四）、同『シナ（チャイナ）とは何か——岡田英弘著作集・第四卷』（藤原書店、二〇一四）などの提言もあり、ある種の中国中心主義的な見方を相対化する視点が含まれている。

また、既述の（一）とも関連するが、比較思想的な視点を含んだ、（6）中国思想とキリスト教やアリストテレス哲学との交渉に関する研究としては、やはり前掲の堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』（上・下）の他にも、近年の注目すべき達成として、マテオ・リッチ（柴田篤訳注）『天主実義』（平凡社・東洋文庫、二〇〇四）、岡本さえ『近世中国の比較思想——異文化との邂逅』（東京大学出版会、二〇〇〇）、同『イエズス会と中国知識人』（世界史リブレット）（山川出版社、二〇〇八）、また、同じく論攷として、神崎繁『魂の位置——十七世紀・東アジアにおけるアリストテレス「魂論」の受容と変容』（『中国—社会と文化』第十九号、中国社会科学学会、二〇〇四）などに指を屈することが出来る。

併せて、最近の顕著な動向として、（7）中国思想とイスラーム哲学との比較、または、中国ムスリムとの思想的交流・交渉に関する研究の大幅な進展を指摘することが出来る。この分野では、井筒俊彦『意識と本質——精神的東洋を求めて』（岩波書店、一九八三）↓岩波文庫、一九九二）などが、その先駆的な存在として、夙に名高いが、ごく近年においては、むしろ思想的な交流や交渉、影響関係に力点を置いたものとして、堀

池信夫『中国イスラーム哲学の形成——王岱輿研究』（人文書院、二〇一二）、堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（『アジア遊学』一二九号、勉誠出版、二〇〇九）、佐藤実『劉智の自然学——中国イスラーム思想研究序説』（汲古書院、二〇〇八）、中西竜也『中華と対話するイスラーム——17～19世紀中国ムスリムの思想的営為』（京都大学学術出版会、二〇一三）などが注目される。その他、『中国イスラーム思想研究』創刊号（二〇〇五）・第二号（二〇〇六）・第三号（二〇〇七）において、明代の中国人ムスリム学者・劉智（一六六〇頃～一七三〇頃）の著作『天方性理』の訳注を連載中である。

これらに対して、（8）より積極的に比較思想的な立場に与し、それを標榜するものとしては、比較的早い時期のものに、平岡禎吉『淮南子に現れた気の研究』（漢魏文化学会、一九六一）↓改訂版、理想社、一九六八）があり、古代中国の「気」の思想と古代ギリシアの自然哲学との対比・比較を試みている。また、前掲の井筒俊彦『意識と本質——精神的東洋を求めて』では、『東洋哲学』の共時的構造化が志向されて、老荘思想から、仏教・禪、イスラーム神秘主義・スーフイズムなどの共通性を示唆するとともに、そこでの瞑想体験などが分析や考察の俎上に載せられている。その後も、佐藤貢悦『古代中国天命思想の展開——先秦儒家思想と易的論理』（学文社、一九九六）が、荀子とホップスなどを比較する他、近年の労作と言える、中島隆博『残響の中国哲学——言語と政治』（東京大学出

版会、二〇〇七）、同『共生のプラクシス——国家と宗教』（同、二〇一一）では、ハンナ・アレントやエマニュエル・レヴィナス、ジャック・デリダら、現代思想の旗手たちとの対話が試みられている。

二 比較思想の立場から見た、戦後の中国近世思想史研究について——島田虔次と溝口雄三の両氏を例として

次いで、筆者の専門でもある中国近世思想史研究に関して、戦後日本を代表する島田虔次と溝口雄三の両氏をめぐって、若干の考察を展開したい。まず、総じて両者とも、ウエイトの違いはあっても、西欧の政治・社会思想史が暗黙の参照枠として前提され、機能していることが確認される他、溝口氏の場合には、日本との比較に関する志向も強いことが特徴とも言える。

島田氏は、その代表作『中国における近代思惟の挫折』（筑摩書房、一九四九）改訂版、一九七〇）のち井上進・補注、平凡社・東洋文庫（上・下）、二〇〇三）において、明代中葉以降の陽明学の歴史的・思想的な展開の裡に、「天と人との分裂」を見出し、ひいてはそこに個人の析出や近代的な市民意識の萌芽を看取しつつも、その早過ぎた出現の故に、それが挫折を余儀なくされた、との結論を導いた。こうしたトレースが、いわば時代性の刻印もあってか、F・ボルケナウなどを下敷きとしつつ、「自然」から「作為」へ、というかたちでの近代性への道筋を描出した、丸山眞男『日本政治思想史研究』の立場

とも酷似することは、注目に値しよう。両者はまた、朱子学の解体過程の裡に、近代的な思惟様式の萌芽を見ようとする点でも、共通している。加えて、続く『朱子学と陽明学』（岩波新書、一九六七）において島田氏が、陽明学的展開の行き着いた地点を「内」の凱歌、「聖人の道の「内」化のクライマックス」と規定しつつ、一方で徂徠学を「道」の徹底的外面化」と評価する姿勢も、奇しくも丸山氏の観点と相補的な位置にあると言うことが出来る。因みに、氏は、「最初から中国の獨自性をかかげて理解を断念するよりは、もつともよく整備されているヨーロッパ風學問の諸概念をインデックスとして、つまり、中国のうちにヨーロッパを讀もうとして、まず、進む以外はない。」（同書、「あとがき」、三二一九頁）と論断する。何れにせよ氏が、中国儒教に対して「満腔の共感」を覚えつつも、その立場としては、「いわゆる近代主義者、否、ヨーロッパ主義者ですらあった」（三三二頁）ことは、紛れもない。

次いで、溝口雄三氏は、まず、その出世作『中国前近代思想の屈折と展開』（東京大学出版会、一九八〇）などを通じて、島田虔次、荒木見悟、西順蔵の諸氏ら、戦後日本の中国思想史研究を代表する諸先学の業績を批判的に摂取、継承しつつ、上は宋代から、氏の狭義の専門領域である明清期を経て、下は清末、近・現代をも視野に収めつつ、広く中国の近世、あるいは前近代を展望する広闊な視座に立って、この時期の思想史に一貫する内実を掴み出そうとした。また、その際、その連続性の

側面を積極的に抽出することを通じて、むしろ伝統思想の自生的・内在的な発展に伴う、その革新的な変容と再生を述べた。そのため、翻つて、中国的近代は、明末の段階で「挫折」したとする、島田虔次氏の所説は、批判と克服の対象となるとともに、島田氏のこうした枠組自体もまた、西欧的な価値基準を外在的に中国に当て嵌めようとするもの、との批判を惹起する所以ともなった。しかるに、溝口氏の場合も、その実、西欧の政治・社会思想史が暗黙の参照枠とされていることは、否定しやうのない事実である。すなわち、明末清初期には、政治観・君主観・公私観、そして人間（人性）観などの上で大きな変化が現れたが、その背景には、富民層（地主・商人層）の経済的・社会的力量の増大があったことを立証し、彼らが恰もヨーロッパのブルジョアジーが果たした歴史的役割にも比定し得る役割を演じたことを示唆している。

なお、溝口氏の場合、比較的初期の頃には、主として西洋の政治思想史や社会思想史が念頭に置かれていたのに対して、後に『中国思想のエッセンス——異と同のあいだ』（岩波書店、二〇一一）にも取められた、相良亨氏と組んだ『文学』誌上での連載（一九八七—一九八八）の頃に至ると、中国と日本という対比へと関心が大きく傾き、やがて『中国の公と私』（研文出版、一九九五）など以降になると、もう一度、それらを踏まえて、中国を中心に、日本や西洋世界との比較が改めて問い直されているように窺える。また、その際、主としてヨーロッパ

的な価値基準の相対化が目指された、初期の段階では、歴史的な時間軸上のタテの文脈における比較や対比に、概ね主眼が置かれていたと言えるのに対して、後年、溝口氏のなかで、中国を中心としながらも、中国・日本・西洋の何れもが等分に相対化に附されるようになること、むしろ歴史的な背景や社会構造などをベースとしつつ、いわばヨコの水平軸における、思想の構造的な差異や対照に、多く目が向けられるようになった如く見受けられる。逆に、江戸儒学に対する朝鮮儒教の影響の大きさに鑑みても、東アジアの中で、中国と日本に挟まれた恰好で、朝鮮・韓国が些か等閑視されていることは、現在から見れば、大きな問題点と言えるかも知れない。

- (1) これと関連して、W・L・シュワルツ（北原道彦訳）『近代フランス文学にあらわれた日本と中国』（東京大学出版会、一九七二）も、彼の地の伝統的な中国認識や日本観を知る上で、参考に値する。
- (2) これと関連して、例えば、ジャック・ジュネル（鎌田博夫訳）『中国とキリスト教——最初の対決』（叢書・ウニベルシタス）（法政大学出版局、一九九六）、フレデリック・ジラル（ペドロ・ゴメスの『講義要綱』の和譯と日本の宗教と『東洋の思想と宗教』第二十八号、早稲田大学東洋哲学会、二〇一一）などもまた、参照に値する。
- (3) 本節に関しては、行論の都合上、既往の拙稿「伝統中国をどう捉えるか?——研究史上のボレミックに見る儒教の影」（『現代思想』〔特集：いまなぜ儒教か〕vol.164、青土社）など一部重複する部分があることをお断りしておきたい。

（いとう・たかゆき、中国近世思想史、日中比較文学・思想、国際日本文化センター・総合研究大学院大学教授）